# 蛇が洞

## 蛇が洞

むかし、むかし、岩屋堂の鳥原というところにねぎさん（かんぬし）の息子で、良平さという釣りの名人がおったげな。

良平さは、三度のめしよりも釣りが好きで、いつも、いつも、半田川の淵へ来てはつっちょった。

けわしいがけ淵で昼間でも、じめっとしてうす暗く、ゴーゴー音をたててうず巻いとるちゅう、すごい淵じゃった。

きょうは、どういう日なんじゃろう。糸をたれるたびごとに、バクッ、バクッとくいついてくる。

一度に一匹ならええけど、針もえさもないのに数珠つなぎになって釣れてくる。

うれしいどころか、気味がわるくなっちまった。こりゃあ、夢でも見とるんじゃあなかろうか、とほっぺたをつねってみた。〝いたっ〟夢じゃあなさそうだ。

ほんの少しの間に、手桶一ぱいになっちまった。魚たちは押し合い、へし合いしながらまん丸な口をあけたり、とじたり、良平さに何かもの言いたげじゃった。

家の敷居をまたぐやいなや、

# たぬきとろくじい

「おっかあー、たんと釣って来たぞー。」
どなって手桶をのぞいた良平さは、おったまげて尻もちついちまった。
そのはずさ、あれだけおった魚が、みな消えてなくなっちまっていた。
おかしなこともあるもんじゃ、とまた淵までやって来た。
すると、どうじゃろ！なま暖かい風がビューッと吹き、大きな蛇が淵いっぱいにとぐろを巻きながら真赤な舌を、ベロッ、ベロッと出しちょった。
良平さは男じゃもんで、ぐっと下腹に力を入れて、ビューンと矢を放った。
みごとに命中したと思うや、大蛇の姿はパーッと消え、淵はみるみる血の池になっちまった。
真赤な血が橋の下を流れる時、花が咲いたように美しかったもんで〝花川橋〟と、名がつき、良平さの釣っちょった淵は、だれ言うとのう、〝蛇が洞〟と呼ばれるようになったげな。

飯田　美智子